

保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか

—「理想の保育者」を目指して—

鳥丸 佐知子

本論は、学生が考える「理想の保育者」像が、保育士養成関連の授業を受けることでどう変化するのかを調査したものである。入学直後、および2年後の2回生後期の最終授業時の2回に渡り、現在考える「理想の保育者」像について自由記述で回答を求めた。テキストマイニングによる分析を実施した結果、入学当初は表面的でいくつかのパターンがあった「理想の保育者」像が、2年後には全員ほぼ類似したパターンに変化することが分かった。

キーワード：理想の保育者、テキストマイニング、KHCoder、一人ひとり、安心

1. はじめに

本学の幼児教育学科は、保育士養成校と呼ばれる短期大学のひとつである。そのため、本学に入学する学生の多くは、自然の流れで、自分が将来「保育者」になると考えているものが多い。実際、毎年約90%以上の学生が関連の資格を取得し、保育の現場で働くようになる。

しかしながら、あこがれの職業であったはずの「保育者」として就職できたにもかかわらず、そのうちの数名は、長期間働き続けることなく、比較的早い段階で現場を去っている。また少数ではあるが、資格を取得して養成校を卒業したにもかかわらず、保育職に就かない学生も存在する。何らかの理由で、自分には保育者以外の職業の方が向いていると判断した学生である。

この数年、共働き世帯の増加で、保育所の需要は拡大の一步をたどっている。保育園の数そのものは、増えている地域があるにも関わらず、保育士の人材不足などにより受け入れ体制が整わず、結果として、待機児童数は増加しているといった報道も耳にするようになった¹⁾。

保育士不足の原因の一つとして、資格を持ち

ながら「保育者」として就職しない、また就職してもすぐに辞めてしまうという一群が存在するという事実がある。このような現象はなぜ起こるのか、彼・彼女らが描く「保育者」イメージと、実際に就職してからの「保育者」イメージのずれはどこから生じているのか、その原因について探ることは、「保育者」として働き続ける人材を養成する際にも役に立つかもしれない。

筆者は本学の学生を対象に、これまで様々な方面から調査を実施してきた。その中で、「実習体験」特に2回生前期に実施される幼稚園実習は、将来を決めるうえで、ひとつの大きな節目となっていることが見えてきた。また、保育士養成関連の授業を受講することで「保育者」（である自分）と「乳児」や「幼児」を自然と自らと関連付けて考えるようになり²⁾、彼女らが持つ「保育者」「乳児」「幼児」イメージ^{3)、4)}も、より深化することが分かった。

今回はこれら一連の調査の総括として、彼女らの描く「理想の保育者」像について調査した。本論は、彼女らが初期に描いていた「理想の保育者」像が、2年間の様々な体験を通して、最終

的にどう変化するのか、自由に記述してもらうことにより探ったものである。

2. 方法

1. 調査対象者

2016年度に、本学幼児教育学科に入学した女子短期大学生を対象とした。

<第1回調査>

2016年度前期『発達心理学』を受講していた女子短期大学1回生268名中、有効なデータが得られた143名

<第2回調査>

2017年度後期『教育心理学』を受講していた女子短期大学2回生246名中、有効なデータが得られた200名

2. 調査時期

<第1回調査>

2016年度前期『発達心理学』の初回授業時間

<第2回調査>

2017年度後期『教育心理学』の最終授業時間

3. 調査内容

自らが考える「理想の保育者」像について、自由記述による回答を求めた。

4. 倫理的配慮

なお調査対象者には、インフォームド・コンセントを行い、本研究への協力に同意したものを調査対象者とした。回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことによる不利益は生じないこと、感想の一部をデータとして使用することがあるが、回答者個人を特定しないものであること、教育・研究の目的以外には使用しないことを口頭で説明し、了承を得た。

3. 結果

学年別にすべての文章を入力し、テキストマイニングを実施した。分析にはフリーソフトウェア「KHCoder」を用いた。

Table1とTable2は1回生の入学直後と、2年後の2回生後期に実施した調査の形態素分析を行い、そこで抽出された語で、出現頻度30回以上のものを、出現頻度順に並べたものである。またFig.1とFig.2は、その出現頻度30回以上の語を用いて「共起ネットワーク」図（抽出語を用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだ図）を作成したものである。

Table1

抽出語	出現回数
子ども	175
保育	104
先生	71
思う	52
信頼	34
保護	30
考える	23
優しい	22
笑顔	21
人	21
気持ち	17
楽しい	14
寄り添う	13
成長	13
明るい	13
厳しい	12
一緒	11
関係	11
寄り添える	10
向き合う	10
親	10
元気	9
自分	9
遊ぶ	9
コミュニケーション	8
見る	8
行動	8
子供	8
心	8
大切	8

最初に、一人当たりの文章の文字量の平均数を比べてみると、1回生が61.7字に対して、2回生は205.2字と、記述量では約3倍に増加することが分かった。

次に形態素分析を行なって抽出した言葉の出現頻度について、2度の調査結果を比較しながら見てみる。上位にある単語について比較すると、いずれの学年でも「保護」「笑顔」「大切」「信頼」「成長」「一緒」「寄り添う」「寄り添える」「言葉」「関係」「明るい」「優しい」「楽しい」「元気」「ほめる」「個性」等の言葉は、出現頻度の順位に差はあるものの、比較的上位に見られる。

Table2

抽出語	出現回数
子ども	835
保育	673
思う	203
考える	169
保護	167
笑顔	146
気持ち	123
大切	113
信頼	106
成長	95
先生	82
一緒	78
一人ひとり	76
自分	74
常に	66
寄り添う	63
理想	62
関係	56
安心	52
受け止める	51
明るい	49
楽しい	45
楽しむ	44
持つ	42
見る	40
目指す	38
学ぶ	37
関わる	37
自身	37
築く	37

それに対して1回生のみ上位に出現した言葉として「厳しい」「喧嘩」「叱る」「コミュニケーション」「全力」「お手本」「ピアノ」「にこにこ」等があった。また2回生のみ上位に出現した言葉として「一人ひとり」「安心」「受け止める」「楽しむ」「経験」「環境」「悩み」「目線」「認める」「対応」「援助」「支援」「尊重」「向上心」「共感」「共有」などが見られた。

次に2つの共起ネットワーク図を比較しながら結果を見てみたい。まず一目瞭然で分かることだが、1回生の図では様々な言葉が、いくつかの塊になって散見されているのに対し、2回生の図では、限られた言葉に集約され、パターンもひとつにまとまっていることが分かる。

これは、1回生の段階では、それぞれが描く「理想の保育者」像にいくつかのパターンがあって、パターン別にまとまっているのに対し、2回生になると、記述量が増えているにも拘らず、その内容はほぼ同様のものに集約してきていることを示している。それぞれについて解釈する。

1回生では「（子どもの）気持ちを考え、寄り添える」「全力で向き合って遊ぶことができる」「時に優しく、時に厳しい」「明るく元気で、回りを見ることができる」「保育者として一緒に子どもを保護し、子どもを思う、信頼できる楽しい先生」「一つ一つの行動の積み重ねにより、たくさんの成長につながる良い関係を持つことを大切にする」「子どもの心や言葉を理解しようと、寄り添い接することができる」「自分自身、今でも保育園が大好きだったのを覚えているが、親や子どもとのコミュニケーションを大事にし、必要なことは責任をもって言うことができる」保育者などにまとめられるであろう。

一方2回生では、（理想の）「保育（者）とは、子ども一人ひとりを大切に思い、寄り添う気持ちを持っている人だと考える」、「明るい笑顔」、

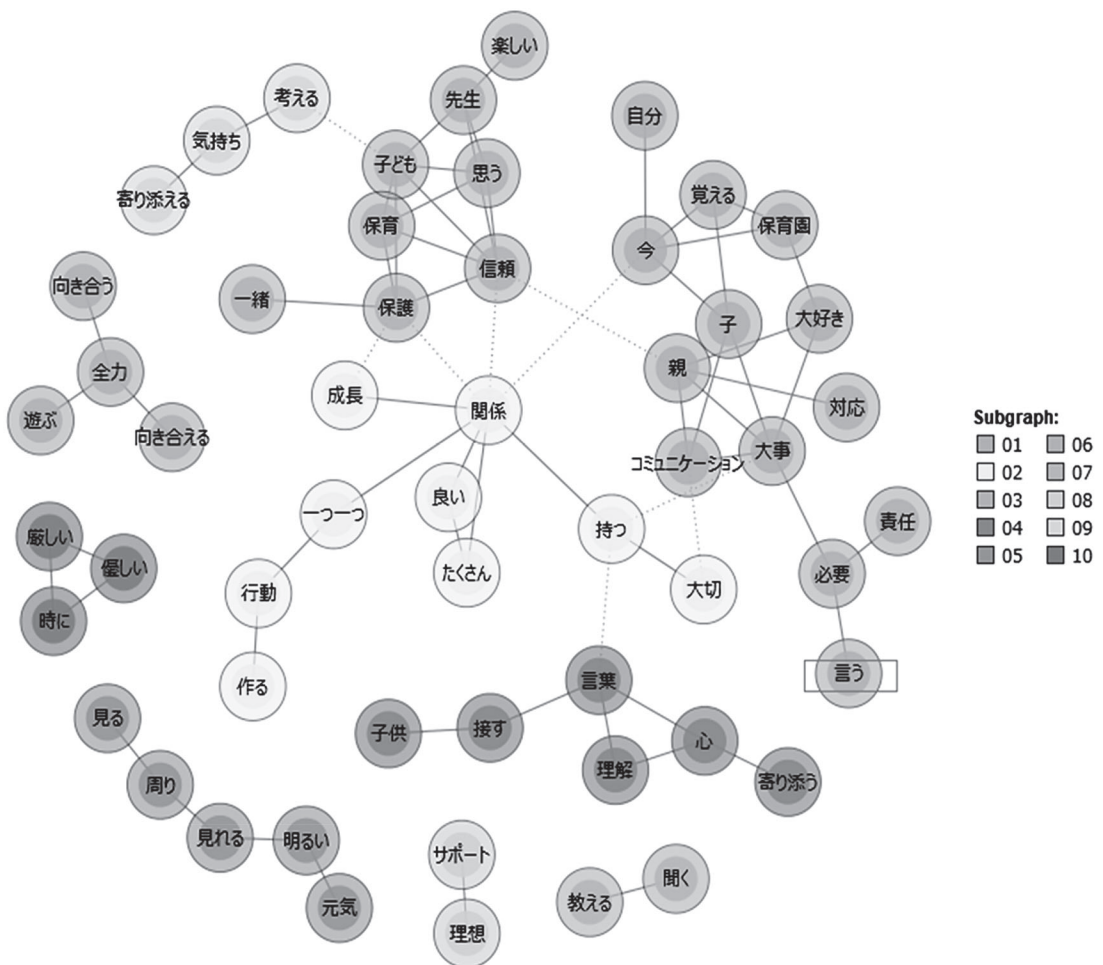


Fig.1 共起ネットワーク図 (1 回生)

「(子どもを) 保護し、信頼される関係を築くこと」「自分自身」も「一緒に成長する」、「(望ましい) 環境を作ることができる」、「変化に気付くことができる」、「悩みの相談にのる」「(子どもを) 認め、褒めることができる」などの内容に集約されている。

次に学年別に具体的な記述例をいくつかあげる。

1 回生

・明るい保育士です。毎日明るい保育士だったら子ども達も明るくなると思います。でも子どもが悪いことをしたり、暴言を言ったりしていた時は厳しくしかる必要があると思います。保育士は子どもだけでなく、保護者も保育しなければならないので、保護者に対しての接し方も信頼してもらえる保育士になりたいです

・ただ優しいから子どもに好かれるのではなく、

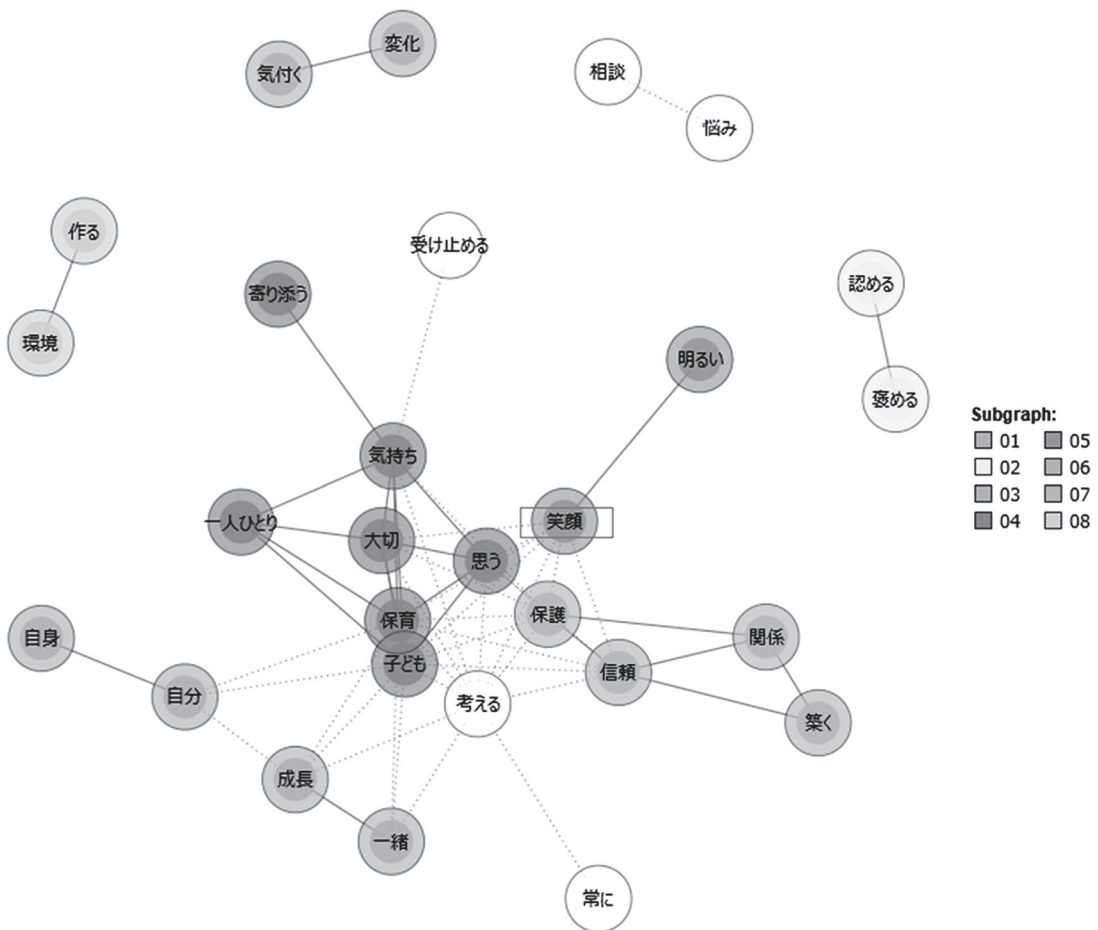


Fig.2 共起ネットワーク図 (2 回生)

優しくも時にはしっかり怒り、子どもとの信頼関係が作れた上で子どもに好かれる先生になりたい。

・子どものためになることをできる先生。一緒に楽しく遊んだりするのはもちろんで、駄目なことはちゃんと叱って正しいことを覚えてもらえるようにする。あとは、信頼してもらえるようになる。この先生にだったら何でも言えるかと思ってもらえるような先生。

・園児からも保育者からも信頼してもらえる保育者。信頼してもらわないと園児や保育者とコミュニケーションが取れないから。メリハリをつけている保育士。

・しっかり目的をもって、いいことと悪いことの区別を教えてあげられる保育士になりたいです。常に園児に本気で向き合い、園児にとって私との時間が楽しいと思ってもらえるようになります。また、ピアノがとても上手に引ける先生になりたいです。歌うことが楽しいと

思ってもらえるようにサポートできればいいなと思っています。

・子どもと向き合い、保護者と一緒に育てている保育者です。子どものその日の成長を一つ一つ発見し、その様子を伝えられれば保護者も子どもと向き合いやすくなると思うし、保護者の信頼を得られれば、気になることがあっても気軽に聞けると思います。

・子ども一人一人の可能性を信じ、広げられる保育者になりたいです。そのためにはまず当たり前のこと（挨拶など）をしっかりと見本となること。また、子どもだけでなく保護者との関係も大切にしたいです。保育士と保護者の間で連絡がとれていたり、信頼がしっかりできていたりしていることが子供のためにもなると思います。子供からも保護者からも信頼されるようになりたいです。

・保育者が子どもに押し付けるのではなく、子どもの意見をできる限り尊重して寄り添うことができる保育者がいいと思う。

・子どもからも保護者からも信頼されている保育者になりたいです。また、子どもと一緒にいつも全力で遊んだり、全力で向き合える保育者になりたいです。

・少しでも子どもの気持ちに寄り添えて、全力で子どもに向き合いたい

2 回生

・私は子ども一人ひとりに安心感を与えられる笑顔が素敵な保育者になりたい。なぜなら、実習を経験し、改めて保育者の安心できる雰囲気

がとても大切であると感じたからである。子どもは保育者との信頼関係があるからこそ安心して様々なことに挑戦し、成長していくのだと思う。困った時やもやもやした気持ちを抱えている時はそのことに気づき、目を合わせて寄り添う等して、一人ひとりを温かく見守ることができる雰囲気を持つ保育者になりたい。

・子ども一人一人を大切にし、小さな変化にも気づくことができる保育者である。小さな変化でも気づいてもらえると嬉しくなるのは私だけではなく、子どもも同じだと思うし、そういった嬉しい気持ちの積み重ねから信頼関係を築くことができると考えている。信頼関係を築くことはとても大切なことだと多くのことで学んだ。信頼関係があるからこそ、子どもも保育者に安心して甘えられるのだ。先生に会えるから園に行くのが楽しみだと子ども達が思えるような保育者を目指して現場に出ても頑張りたい。

・子ども一人一人の個性を大切にしながら、今何を求めているのか気持ちを感じ取り、受け止めそれを一緒に楽しんだり遊んだりしながら子ども達にとってこの先生といると安心する、楽しいと思ってもらえる保育者になりたい。そのためには、子どもと同じ目線に立ち、活動中の子どもが興味を持つもの、表情、姿、声などから感情を読み取っていかうと思う。私はピアノを弾くことが好きなので、歌や音楽から表現する楽しさを伝えたいと思う。また、保育者はコミュニケーションが大切である。なぜなら、子どもだけではなく、保護者ともかかわることが多くあり、悩みや不安を少しでも解消できるように努力する。毎日笑顔を欠かさず保育と向き合うことである。

・子どもや保護者等一人一人の存在を大切に、温かく親身に寄り添い、笑顔で安心感を与えられるような柔らかな雰囲気をもった人でありたい。また、私は、自然や音楽との関わりに溢れた生活の中で、子ども達が自然と楽しみながら完成、創造性を高められるような保育を理想とする為、感性を豊かに、常に新しい気持ちで子どもと瞬間の感情を共有することを大切に、いつまでも学び吸収していきたいという揺るぎない心を忘れずに、真摯に物事を受け止め、どんな時でも寛大な心を持っていたい。

・子ども達一人ひとりをよく見て、それぞれの子の良い所を見つけ、伸ばしていける保育者になりたい。保護者に日中の様子や成長したことを伝えるためだけに子ども一人ひとりを見るのではなく、その子にしかない特徴や良い所を見つけない。できないことの援助だけにとらわれず、良い所を伸ばしてその子が自信を持てるようになると良いと考えている。そのために、子どもを見る力を養うことや、少しの出来事などでも気づくことを大切に、見つけたときは子どもが嬉しくなるような言葉掛けで伸ばしていけるような保育者になりたい。

・明るく笑顔溢れる、温かい雰囲気が作れるような保育者であり、子どもの気持ちに寄り添い、何事にも子ども達と一緒に楽しんだり、発見したり、感じ合える保育者である。また、子どもだけではなく、保護者ともたくさんお話をし、保護者の気持ちに寄り添い、気軽に相談できる存在であるため信頼関係を築ける保育者になりたい。あと一つ大切にしたいことは、させる保育ではなく、自ら進んでしたいと思えるような保育を目指し、無理やりやらせるのではなく、やりたいと思えるような声掛けをしていける保育

者であることが理想である。

・どんな時も子どもの気持ちに寄り添うことができる保育者が理想の保育者像である。子どもが悲しい時、寂しい時はもちろんだが、子どもがいけないことをした時も寄り添えるようになりたい。ただ叱るのではなく、子どもの気持ちに寄り添い、なぜしてはいけないことをしてしまったのかを考え、その上で、どうしてだめなのかを伝えていきたい。

・私には理想とする先生がいる。その先生は子どもの行動一つ一つの意味を読み取り、その気持ちに寄り添い、受け止め、行動することができる。その姿を見て私は先生に憧れを抱いた。先生の行動に子どもがついてくる。それだけで子どもたちが先生のことが大好きで信頼していることがよく分かる。私は先生のような、子どもの気持ちに寄り添うことができ、子どもが安心し、信頼できるような温かい保育者になりたい。そして、日に子どもと過ごす中で、子どもの成長に喜びを感じながら、自分も学び成長し続け、一人一人の子どもに合わせた配慮や支援ができ、成長を促すことのできる保育者になりたい。

3. 考察

それでは2回の調査結果を比較しながら、特徴的な変化とその理由について、キーワードとともに考察していきたい。

いずれの学年でも、子どもだけでなく保護者との「信頼」関係を築くことや、コミュニケーションが重要であると考えているところは共通点であると思われる。しかし学年によって特徴的な記述もいくつかみられる。

例えば、1回生の記述の中で比較的多くみられるのが、「厳しい」「喧嘩」「叱る」「全力」など

のキーワードであるが、そこから垣間見えるのは、メリハリのある保育者でありたいという思いである。明るくて笑顔がステキで、優しい保育者であることは当然だが、同時に、時には優しいが、時には厳しい保育者、ダメなことはきちんと叱ることのできる保育者、いいことと悪いことの区別を教えてあげることができ保育者など、子どもの成長に寄り添う存在として、「しつけ」の類の重要性を書くものが多かった。

また子どもと向き合う時は、常に「全力」で向き合うことが大切であると考えものも多かった。さらに技術面としてのピアノの重要性を記すものも見られた。

一方で2回生になると、そのイメージはより具体的になり、絶対的な記述量も増えるが、「一人ひとり」「安心」というキーワードを含む文章を書く学生の数が増える。また「受け止める」「楽しむ」「経験」「環境」などのキーワードも比較的上位に出てくるようになる。

1回生の記述が、外から見える（感じられる）「理想の保育者」イメージであったのに対し、2回生になると、そのイメージも、自らと子どもと保育者を含む全体として捉え、そこでの「雰囲気」に注目するようになるのは大きな変化のひとつと言えるであろう。そこにあるキーワードは「安心」である。メリハリよりも、まずは「安心」できる環境を提供できること、また、自らがそういう存在になることが重要であると感じるようになっていく。

さらにもう一つのキーワードとして、「一人ひとり」があるが、「個人差」を含む、一人ひとりへ注目することの重要性が、いたるところで表現されるようになる。

その子にしかない良さもあること、そこに注目することからこそ、可能になる関わりがあること。できないことの援助だけにとらわれず、良

いところを伸ばして、その子が自信を持てるような言葉がけをすることの重要性なども、語りの中に含まれるようになる。また、一人ひとりに目を向けているからこそ、気付くことのできる小さな変化があること。それは、良い意味でも悪い意味でも、何かの大きなヒントになる可能性があることにも気付きは始めている。

また、常に「寄り添う」ことに重みを置いているからこそ気付くことの出来る「小さな変化」の存在。もしその変化が子どもの成長に関わる出来事であったなら、保育者とともに喜ぶ姿勢がある。そしてそこには、子どもの成長に喜びを感じながら、自分自身も学び成長する保育者がいる。

こういった語りの中に、1回生時のキーワードとして現れていた「全力」という言葉はない。むしろ、自然な感じでの関わりこそが理想であるとする形へ変化している。

今回の調査は、あくまでも彼女らが描く「理想の保育者」像について記述してもらったため、即、現実の保育に結びつくものではないし、現実の保育の現場で、どこまで可能なのかという疑問は残るかもしれない。また今後彼女らが働く場の環境もさまざまであろう。

しかしながら、2年間という短い期間ではあったが、保育者を目指す仲間たちと過ごした時間は大変濃密なものであったのではないだろうか。その経験が、お互い気付かない間に、同じようなイメージの「理想の保育者」を目指すことになっていたという事実は、大変興味深い事実であると感じた。

「反省的实践家」という言葉があるが、保育者とは、これが完成した保育者だという、あるべき姿は定めにくく、日々の反省と実践をくり返して、その時々適切な関わりをしていくことが求められる職業である。本学の卒業生も、こ

の基本姿勢を忘れないで、日々頑張ってもらいたいものである。

参考文献

- 1) 白石雅紀 (2017) 実習が保育者としての就職に影響を与える要因に関する考察－A 短大の事例より－
東京未来大学研究紀要 11, 181-189
- 2) 鳥丸佐知子 (2012) 実習経験は彼女らの何を変えたのか－入学前課題「乳幼児、ふれあいウォッチング」を通して－
京都文教短期大学『研究紀要』第 50 集 105-114
- 3) 鳥丸佐知子 (2016) 保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか－「保育者」イメージを中心に－
京都文教短期大学『研究紀要』第 54 集 41-46
- 4) 鳥丸佐知子 (2017) 保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか－「乳児」「幼児」イメージを中心に－
京都文教短期大学『研究紀要』第 55 集 39-48

